

国立教育政策研究所 令和2～5年度プロジェクト研究
「社会情緒的（非認知）能力の発達と環境に関する研究：
教育と学校改善への活用可能性の視点から」
発達調査チーム 研究報告書
の概要について

本プロジェクト研究 発達調査チームでは、児童生徒の社会情緒的能力について、発達の実態と環境による影響を検討するための調査研究を実施した。小学校から中学校進学後にかけて縦断調査を行い、小中接続期の社会情緒的能力の発達、学校生活や心身の健康状態との関連、学校・学級や家庭環境からの影響等について検討した。

1. 調査研究の目的・概要

（1）調査研究の目的

人生における成功や幸福、健康や社会適応について、認知能力のみならず、社会情緒的能力が重要な説明因子となることが相次いで報告され、国際的に社会情緒的能力の教育への関心が高まっている。一方、日本においてはこの能力について大規模追跡調査に基づく検討が十分ではなく、発達の様相、学力との関連、学校生活への影響の実態について実証的知見が必要である。本研究では、学校環境や人間関係の変化が大きい小中接続期の追跡調査を計画し、社会情緒的能力の中核となる具体的な内容として感情知性、セルフコントロール、向社会的行動に着目した。そして、①社会情緒的能力と学力の双方が、学校適応と心身の健康に持ち得る影響の実態、②社会情緒的能力及び学力の発達の变化と相互の関連性、③社会情緒的能力及び学力を育む家庭環境と学校・学級環境の特徴、の3点について知見を得ることを目的に調査研究を実施した。

（2）調査研究の概要

二つの協力自治体の公立小中学校（小学校：約50校、進学後の中学校：約30校）に在籍する2021（令和3）年度時点で小学校6年生の約3,000名の児童生徒とその保護者、小学校（進学後は中学校）の学級担任、管理職に対し、2021（令和3）年度から2022（令和4）年度にかけて、半年の間隔で計3回（小学校6年生冬時点：1回、中学校1年生夏時点と冬時点の2回）の縦断調査を実施した。

主な調査内容として、児童生徒には社会情緒的能力（感情知性、セルフコントロール、向社会的行動）の質問紙調査のほか、各学年末に国語と算数（数学）の学力テストを実施した。そのほか、アウトカムとして健やかな学校生活と心身の健康について、環境要因と

して学校・学級での経験（学級風土、担任や友人との関係など）、家庭での経験（保護者との関係など）に関する質問紙調査を行った。保護者には子供の日頃の様子、家庭環境として養育態度や社会経済的状況等を調査した。学級担任には学級の雰囲気のほか、担任自身の属性、精神的健康状態を調査した。学校管理職からは、小中連携の取組、学校の安全・危機予防の取組状況等の情報を得た。これら複数の調査結果からの情報に基づき、児童生徒の発達と適応、環境について分析を行った。

【研究期間：2020（令和2）年～2023（令和5）年度、研究代表者：大金伸光（生徒指導・進路指導研究センター長）】

2. 研究成果の概要

第1部 研究の背景と目的

第1章 社会情緒的能力をめぐる研究動向と課題：本研究の目的と構成

社会情緒的能力をめぐる研究動向と課題について国内外の先行研究を概観し、「認知能力」と「非認知能力」の議論を興した教育経済学研究、近年のOECD等における社会情緒的能力に関する国際的関心、心理学分野における社会情緒的能力の研究等について示した。これらを踏まえ、特に環境の変化が激しい小中接続期に着目した日本の児童生徒に関する実証研究の必要性を論じた。社会情緒的能力の内容について研究レビューを示し、その中核として感情知性、セルフコントロール、向社会的行動の重要性を示した。

本研究の目的及び分析視点として、以下、三つを示した。【分析視点Ⅰ】：児童生徒の「社会情緒的能力」及び「学力」が、健やかな学校生活と心身の健康状態というアウトカムを説明するのかを検討する。同時期連関に加え、小学校時の能力の状態による、中学校進学後のアウトカムへの影響を分析する。【分析視点Ⅱ】：小中接続期における「社会情緒的能力」と「学力」の発達について、安定性と変化を検討する。また、時間軸上における相互の関連性を分析する。加えて、それぞれの能力はいかなる環境によって育まれやすいのか、家庭環境や学校・学級環境との関連を分析する。【分析視点Ⅲ】：小中接続期の育ちを支える学校・学級の環境づくりにつながる知見を得るべく、学校や学級の特徴が、学級単位、学校単位でみる社会情緒的能力及び学力に及ぼす影響を検討する。

第2章 小中接続期の社会情緒的能力の研究動向：感情知性について

社会情緒的能力のうち感情知性に焦点を当て、児童生徒の健やかな学校生活及び心身の健康との関連について検討した研究のレビューを行った。アウトカムとしての健やかな学校生活について、学級・学校適応感、達成関連感情、いじめの加害・被害、欠席日数との関連、心身の健康についてウェルビーイング、SDQ（子どもの強さと困難さアンケート）

との関連を検討した研究を取り上げた。さらに、学力と感情知性の関連について検討した研究をレビューした。最後に、小中接続期における感情知性の働きについて検討した研究をレビューした。先行研究からは、感情知性の高い児童生徒の方が、学校生活と心身の健康状態が良好であることが示された。また学力との関連については、メタ分析を行った研究から弱い相関が見られることが示された。更に小中接続期における感情知性の働きについては、その重要性が示唆されているものの、大規模データを使用した更なる研究が必要であると考えられることを示した。

第3章 社会情緒的能力の発達：セルフコントロールと向社会的行動について

社会情緒的能力のうち、セルフコントロールと向社会的行動に焦点を当て、アウトカムとの関係、思春期、青年期における発達の特徴、社会環境的要因の影響、及び支援方法についてレビューした。具体的にはセルフコントロールについて、学力や学校適応、仲間との関係性や問題行動、心身の健康と関連することを説明した。また、セルフコントロールは、思春期、青年期に一時的に停滞若しくは低下する可能性がある。社会環境的要因としては、養育者との関係や睡眠などが重要な影響を与える可能性をレビューした。支援方法はまだ確立していないが、運動や音楽などが有効かもしれない。向社会的行動については、学力や仲間関係、心身の健康と関連することを示した。さらに、向社会的行動についても青年期に低下する可能性があること、養育者との関係やメディアの影響がみられることを示した。支援方法としては、他者の向社会的行動を観察することや幸福感や自己肯定感、有能感を持つことなどがあげられる。

第4章 社会情緒的能力に関する国際調査の動向

まず、OECDの生徒の学習到達度調査（PISA）とその測定方法に焦点を当て、PISA2018年生徒質問調査において、社会情緒的能力がどのような枠組みで測定されているかを紹介した。OECDによる教育における社会情緒的能力の重要性の認識や、PISA2018年調査の文脈の中で、これらのスキルがどのように定義され、測定されているかについて述べた。また、PISA2018年調査から得られたデータに基づいたOECDの分析の事例を紹介した。次に、OECD国際成人力調査（PIAAC）について、16～65歳の「成人力（adult skills）」に関する調査における「社会情緒的能力」に関わる検討や設定などの状況について概観した。ここでは第1サイクル（2011（平成23）年）及び第2サイクル（2022（令和4）年）に実施された調査設計における調査内容を紹介した。

第2部 研究の方法と調査内容

第1章 研究対象と調査デザイン

第2章 分析に使用したデータの概要

小中接続期における児童生徒の社会情緒的能力の発達と、健やかな学校生活や心身の健康というアウトカムとの関連、及び学級・学校環境や家庭環境から及ぶ影響について検討するため、小学校6年生の冬、中学校1年生の夏と冬の計3回・3時点にわたり、同一の児童生徒を追跡する縦断調査を設計した。第2部では、児童生徒への質問紙調査と学力調査、保護者、学級担任、学校管理職を対象とした質問紙調査の内容について示した。特に、児童生徒の社会情緒的能力については、信頼性と妥当性のある心理尺度を用いた測定を行い、ここではその内容や項目例を示した。そのほかの調査内容（指標）の測定についても、用いた尺度、得点化の方法を説明した。これらの測定指標についての記述統計量と、主な指標間の単純相関係数を一覧に示した。

第3部 小中接続期における健やかな学校生活と心身の健康の背景：「社会情緒的能力」及び「学力」との関連【分析視点Ⅰ】

第1章 「社会情緒的能力」及び「学力」による「学校生活」「心身の健康」への影響

第2章 小中接続期の「社会情緒的能力」及び「学力」が児童生徒の生活と健康に持ち得る意味

第3章 分析結果に関する考察と留意点

小中接続期における社会情緒的能力及び学力がどの程度「学校生活」や「心身の健康」に関わるアウトカムと関連するかを検討した。そのために、まず、小学校6年生～中学校1年生の各時点における社会情緒的能力及び学力が同時点の「学校生活」あるいは「心身の健康」に関わるアウトカムに対して、どのような関連を示すのか検討を行った。次に、小学校6年生冬時点の社会情緒的能力と学力が、1年後の中学校1年生冬時点における「学校生活」あるいは「心身の健康」に関わるアウトカムに対して、どのような関連を示すか検討を行った。その結果、小中接続期の児童生徒の「学校生活」と「心身の健康」に関わるアウトカムの多くに対して社会情緒的能力と学力が有意な関連を示した。特に、自己回帰の効果を考慮してもなお、中学校1年生冬時点の「学校生活」や「心身の健康」に関わるアウトカムに対して、小学校6年生冬時点の社会情緒的能力や学力が小さいながらも有意な関連を示す結果がみられたことは特筆に値する。

第4部 小中接続期における「社会情緒的能力」と「学力」の発達と環境からの影響【分析視点Ⅱ】

第1章 時点間相関分析

第2章 「社会情緒的能力」と「学力」の相互因果関係

第3章 「社会情緒的能力」及び「学力」に対する環境からの影響

まず、小中接続期における社会情緒的能力と学力の変化と安定性について検討を行った。その結果、時点間相関係数の値等より、各能力の大小関係については時点間で完全に維持されるわけではないものの安定的に引き継がれていくこと、小中接続期に特有と考えられるような変化の仕方がみられるわけではないことが示唆された。また、社会情緒的能力と学力の縦断的な相互の関連性について交差遅延モデルに基づく分析を行ったところ、社会情緒的能力と学力の間の関連は示されなかった。一方、社会情緒的能力内において、各能力の変化に別の能力が関連している場合もあること、その関わり方の多くが能力を伸ばす方向であったことが伺えた。さらに、児童生徒の社会情緒的能力と学力の状態がどのような環境要因から影響を受けているのか、学校・学級の環境と家庭環境について児童生徒個人が感じている特徴に着目して重回帰分析を行った。分析結果からは、社会情緒的能力や学力との同時点的、あるいは経時的変化との関連が示唆される複数の環境要因が見いだされ、学級担任や友人との関係性、学校行事への取組の経験、保護者との関係性などの環境要因が注目された。

第5部 小中接続期の育ちを支える環境づくりに向けて：児童生徒を育む学校・学級の特徴【分析視点Ⅲ】

第1章 学校・学級単位でみる児童生徒の様子

第2章 学級の特徴と児童生徒の「社会情緒的能力」及び「学力」

第3章 学校の特徴と児童生徒の「社会情緒的能力」及び「学力」

児童生徒が所属する学級・学校の特徴と、社会情緒的能力及び学力の関連について検討した。検討に当たり、児童生徒が所属する学校・学級単位でみたときの諸変数の得点の類似性(級内相関)を確認した結果、社会情緒的能力については個人間差が相対的に大きく、学力については学級(学校)間差が相対的に大きいことが確認された。次に、学級単位に基づき、学級担任から見た学級風土、学級担任の児童生徒への関わり方、児童生徒が担任に抱く認識等を説明変数とし、児童生徒の社会情緒的能力及び学力を目的変数とした分析を実施した。その結果、小学校6年生冬時点でも中学校1年生冬時点でも、特に学級風土の良好さ、児童生徒が感じる担任のアタッチメント機能などが、その学級の児童生徒の社会情緒的能力、学力の高さに関連することが示された。また、学校の特徴として、管理職の学校危機予防認知並びに小中連携の取組に着目し、児童生徒の社会情緒的能力及び学力と

の関連についても分析を行った。その結果、学校における学校危機予防認知並びに小中連携の取組の一部が、児童生徒の社会情緒的能力や学力に対して促進的に寄与する可能性が示唆された。

第6部 総合考察

第1章 社会情緒的能力の発達・環境・教育：本研究の結果から見てきたこと

第2章 学校や教育の場で子供に関わる皆様へ

第3章 調査結果の総括と今後の研究及び教育に向けた展望

社会情緒的能力の発達と環境について、本研究の調査から得られた結果の総括と考察を行った。第1章では、中心的な結果に基づき、小中接続期において社会情緒的能力は児童生徒の学校適応や心身の健康を支える役割を持ち得ること、社会情緒的能力の状態は学級・学校、そして家庭といった環境の特徴、そこでの経験から一定の影響を受けていることについて考察を示した。第2章では、特に、学校や教育の場で子供に関わる立場にある方々に向けて、考察と示唆を示した。子供たちがよりよく生きていくためにはどのような力が必要であるのか、包括的な教育のブループリントを紹介するとともに、避けては通れない学校危機への対応について国内外の取組を概観しつつその鍵としてソーシャル・エモーショナル・ラーニングという教育フレームワークを紹介した。そして、社会情緒的能力を育むためにどのような教育実践を展開することができるか、今後の課題を含めつつも期待される多くのことについて考察した。第3章では、本研究の分析結果及び研究範囲について課題や限界点を振り返りつつ、社会情緒的能力に関して今後必要とされる研究の視点、社会情緒的能力の育成に関する教育を考える際の留意点、今後の研究及び教育的実践における展望を示した。